

煮え切らない女兵士

大根1872

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある日、帝都警備隊に見慣れない兵士が赴任して来た、ハーフで、女で、無愛想、これによっぽど顔が良ければ魅力の一つにもなったのだろうが、それほどでも無い、北からやって来た事以外全く不明な女兵士、名をモーリアンIIゲートハート、そんな女と突然バディを組まされた警備隊の若き隊員、セリユーIIユビキタス

これは、どこか「煮え切らない」女と、まったく「煮えたぎった」女の奇妙な物語である。

目次

二話 一話

--	--

12 1

一話

その日、警備隊に所属する兵士、セリユーⅡユビキダス三等軍曹は釈然としない気持ちで一人警備隊の庁舎の廊下を歩いてた

何でも警備隊長がセリユーを呼んでいるような、正確には所在を訪ねて回っている事を、日課の巡察から帰ってすぐに係長から教えてもらったわけだ、自分より立場の上の者が探していて、その時、間が悪く席を外していたのなら自分から要件を聞きに行くのが礼儀だ

そうゆうわけで、セリユーは件の警備隊長の元へと馳せ参じているのだ、それでどうして釈然としないのかと言えば、素直に呼ばれた理由がわからないからだ

これといって大きな案件を抱えているわけでもないし、本日の巡察においても帝都は平穩、磔のオブジェクトが少し増えたくらいで、それだけだ、先任曹長や幹部幕僚ならばいざ知らず、単なるヒラ隊員でしかない自分を隊長自ら探しにかかる理由がセリユーにはわからなかった

まあわからないからといって、じゃあ放っておけるかと聞かれればそんなわけはないの

で、結局セリユーには向かう以外の選択肢は無いわけだが

と、そんな事を考えているうちにセリユーは目的の隊長室の前に着いてしまった、あとはまあ成るように成る、そう思い、扉をノックしようとする

(おや?…話し声)

扉が遮つてよく聞こえないが、人の声がかくぐもつたように聞こえる、思えば確かに、今の隊長は着任してから民間人をよく隊長室に招き、変わった事や困っている事などを聞いていた、そういった姿勢にセリユーは好感を持つていた

成る程そうであれば中に人がいてもおかしくない、客が来ているなら引き返そうかと考えたセリユーだったが、しかしセリユーは扉をノックした、急ぎの用なら大事だし、ダメなら引き返せば良いと考えたからだ

「失礼します!セリユー!!ユビキダス三等軍曹です!」

セリユーの元気な声はオーガに届いたらしく、中で話す声が聞こえなくなり、代わりに警備隊長のドスの効いた返事が来る

「入れ」

無愛想な返事に従い、セリユーは木製の扉を開けて中に入った、廊下とは違う気持ち柔らかいマットの上で、セリユーは中の様子を一瞥した、果たしてそこには警備隊長のオーガと、そしてもう一人見知らぬ者がオーガの机の前において、若干首を回してセ

リユーを見ていた

「来たかセリユー、取り敢えずこつち来い」

引く、ドスの効いた声だ、凶悪な顔付きに隻眼、ともすれば一見悪党に見られがちなこの男こそ、警備隊の長にして『鬼』の異名を持つ、名をオーガと言う、新米警備隊員から叩き上げで隊長まで上り詰めた、まさに生粋の警備隊員だ

「はい」

言われたとうりにオーガの机の前に至り、敬礼をしながらチラリと一瞬、既にオーガの前で休めの姿勢をした人物を見つめた、やはり、セリユーには見覚えの無い人物だった、ただその装いには少しばかり見覚えがある、確かそう、何年か前だ、南部の異民族との紛争に勝利してその際戦勝記念パレードが行われた時に、多くの軍人が誇らしげな表情浮かべ、帝都のメイנסトリートを闊歩する中ただ一行、つまらなそうに列中をトコトコ歩き続ける部隊がいた事をセリユーはたまたま覚えていた、彼らも、そして目の前の人物も同じような服装をしている、帝国兵何万いても戦闘服の上に制服の外套を羽織るような着方をする軍は一つしかないかない、たしか：

(北軍、どうしてこんなところ)

北軍、北部方面軍の略である、帝国の軍隊は大きく東西南北の4つの方面軍と、首都帝都に本部を置く近衛師団、そしてこれは噂程度だが、既存の指揮系統とは別で暗殺専

門の部隊があるとか無いとか、まあとにかく、北軍とは帝国領北方を守護する事が任務の軍で、基本的に北方以外の地域には現れない、まして近衛師団の末端組織でしかない警備隊など来る意味が全く無いのだ、セリユーが疑問に思うのも仕方なかった

「不在間探しておられた様なので、こちらから伺わせて頂きました！」

敢えて隣の人物には触れない様に要件を言った、セリユーの入室を許可した時点で自分に何かしら関係があるのだろうと、半ば直感で判断した、はたしてそれは正しかった様で、切り出したのはなんとオーガではなかった

「オーガ大隊長、もしかしてこの子が？」

発せられた声は隣からした、女性のものだとわかったが、ひどく掠れていて、その声とチラリと見たときに軍服越しに感じた女性っぽい体つきで何とか判断できる、くらいのものだ、しかしそれよりも驚いたのは、セリユーの言葉にオーガが返事をするよりも先に言葉を発した事だ、失礼だとか思うよりも先に、この女性の立場がそうなのではと思っただ、しかし根拠は何もない、全てはオーガの出方次第であった

オーガはまず女性の方の返事をした

「ああまだ若いが能力はピカイチだ、アンタの行動の妨げにもならんし、色々学ぶこともあるだろ、変に歳くった連中よりずっと組みやすいと思うぜ」

「なるほど、しかしそれ程優秀な隊員と組ませて貰うのはちょっと、その、彼女にとって

はどのようなのですか？」

「コイツの心配は無用だぜ、アンタといる間は人事の評定は良いように取り繕ってやるし、それにまあ、資料を読んだ限り別に素人ってワケじゃなさそうだ、セリユーにとつても良い刺激になるだろう」

「まあそういう事であれば」

「ここの交流は大事だ、帝都にやいまでかい悪党どもが住み着いてやがる、アンタほどの兵士がいりゃあ頼もしい、セリユーだけじゃない、ウチの若い連中も鍛えてやってくれ、その代わりコツチの流儀やノウハウは全部持つてつてくれて構わない、頼んだぞ」セリユーを置いて話が進む、と言うかももう終わりそうだ、一応話の流れで色々想像してみたセリユーだが、その根幹がわからない以上手も足も出ない、正直思うところがないわけじゃないが、今は黙って事の成り行きを見守る事にした、いや、それしかできなかった

それからまた、オーガと女性がセリユーにはわからない話を2、3言話してから、最後に女性がセリユーの方を向き、肩に手を置いてもう片方の手を差し伸べた、握手を求められている事に気がついたセリユーは、急いで差し出された手を握った

「モーリアン||ゲートハートだ、よろしく」

「こちらこそ、未熟者ですがご指導の方よろしくお願い致します（と、言つてはみました

けど」

話の流れでそれっぽいセリフを言ったセリユーだが、しかし内心いつたい何に對してよろしくしているのかわからなかった、何の説明も受けていないのだ、ある日見知らぬ人にいきなり「よろしくね」と言われたようなものだ、はつきり言おう、全くよろしくない、少なくともセリユーにとっては

しかしわかる事もあつた、まず名前、モーリアンゲートハート、帝国の西側で良く聞く発音だ、出身か、或いは親のどちらかの生まれがそうなのだろう、次に階級、外套の左腕上腕部にくっついてある肩章が表した階級は少佐、なんと大隊を指揮できる立場の人物だ、そして容姿、髪はよほど短いのだろう、ベリーシヨートといったところか、ベレー帽から覗く髪はくすんだピンク色で、握った手は白手袋越しにもわかるほど、ゴツゴツしていた、そして何よりセリユーの目を引いたのは、その目、氷のように冷たいとか、石のように無機質だとか、別にそう言った印象はなかったが、何となく、そう

(怒ってる?)

無表情だからだろうか、わからない、ただセリユーは何となくそう思った、この出会いがこの先長くなるバディとのファーストコンタクトになるとは、この時のセリユーには知る由もない

「で、さっきの人は何だったのですか？」

握手を済ませたゲートハート少佐は、まだ身辺整理が終わってないとか何とかで席を外した、いや、正確にはオーガがそうするように言つて、それに従つた、身辺整理が終わってないと言ふことは一時的に警備隊に来ていたのではなく、それなりに長く警備隊、もしくは近衛師団に居ると言ふ事だ、そんなことすらセリユーは知らない

さつきまで散々お預けをくらつたセリユーは、若干詰め寄るようにオーガに問ひたした、オーガは特に動じる事はなく、逆に落ち着いた目でセリユーを見返した

「逆にお前は何だと思ふ？」

「何つて、それは……」

予想外の返答にセリユーは少しだけたじろいだ、そしてオーガに言われた通りゲートハート少佐について考える、ちなみにオーガの狙いはセリユーの意見を聞く事ではなく、一度思考を挟む事でセリユーを落ち着かせようとしているのだ、そうとも知らないセリユーは先ほどまでの話の流れを思い出そうとする、まったく素直な子であつた

セリユーは頭の中で確定した情報のみで仮説を立ててみる

(北軍、上級士官、少佐、前線勤務有り、女性、警備隊、鍛える、ふむふむ、なるほど)
「まったくわかりません」

セリユーはきつぱりと答えた、わからないものはわからないし、知ったかぶったり、憶測で物事を判断するのはセリユーの最も苦手とする行為だ、清く、正しく、潔く、この三つこそセリユーの信じる美德であつた

「まあ、そうだよな」

ため息をつくような口ぶりであるが、別にオーガはセリユーに失望失望した訳ではない、逆に変な憶測が無い分話しやすくもあつた

オーガはおもむろに机の引き出しを開けて一つの紙束を取り出すと、それを放り投げのようにセリユーに渡す

「?これはいったい何ですか?」

「人事書類だ、あの少佐についてはそこに全部書いてある、目をどうしておけ」

「こ、これ全部ですか!?!」

厚い、渡された書類は信じられないほど厚かつた、基本的に人事書類は厚くならない、その人物の簡単な略歴と家族構成や身体情報などの個人情報しか書かれていないからだ、自然と軍歴が長いもの程厚くなるが、それでも重みを感じるほどにはならない、ちなみにセリユーなんかは大体A4用紙5枚くらいで、しかも未記入の欄がちよくちよく

ある、対して彼女の手に持ったこの書類の重圧感と言ったら、軽く警備隊一個小隊分の量に匹敵する

「見た目ほど大した量じゃ無い、後ろの方は真つ黒で読めねえからな、適当に読んでも一時間もあれば余裕だ」

「真つ黒？」

「…まあ、見りゃわかる」

セリユーは相当手に持った資料を今すぐに読みたい衝動に駆られたが、流石に我慢した、今はもつと聞かなければならないことが沢山あるためだ、だから次にセリユーはこう言おうとした

「それで、どうしてこんなもの私に渡すのですか？」と

「……」

で、寸断の所で出かけた言葉を飲み込んだ

「どうした？急に黙りこくって」

自慢ではないが、セリユーと警備隊長であるオーガとの付き合いは、幕僚を除いた他の隊員達と比べればの話だが、それなりに長い、殉職したセリユーの父親の知り合いなんだそうで、彼女が警備隊に入る前から何かと面倒を見てくれていた、だからまあ、彼の人となりは少しは知っている

オーガという人間は極めてシンプルな男で、まどろっこしい事を嫌うタチがある、話はいつも短くまとめて話すし、同じ事を二度も三度も言わない、特に今みたいに情報を小出しするような事は心底嫌い、彼自身も決してしないのだ、要するに、オーガが情報を言わないのは「言わない方が良い」事だからであり、セリユーが問いただす事をやめさせないのは、それを強制できる法的な根拠がないからである

と、セリユーは勝手に解釈した、何の証拠も無いただの憶測であったが、状況を見るに、全て正しいとは言わずも少なからず良い線いつてるような気がした、となると、セリユーの次の言葉は決まっていた

「私は、どこまで教えて頂きますか？」

あくまでセリユーは下手に出た、これでオーガも教えられる情報を小出しせず纏めて言える、セリユーなりの気遣いなのだ、そんな彼女の気遣いを、知ってか知らずか、オーガは相変わらずこれといって何かはんのうする訳でもなく、淡々とセリユーの言葉を返すだけであった

曰く

「お前にはあの少佐とバディを組んでもらう、配属先は変わらず捜査課だ、在勤中はあの少佐の階級は気にする必要はない、そう、たとえお前のとこの分隊長が准尉だとしても、指示には従ってもらう、そうゆう取り決めになつて、だが無礼はするな、敬意を持つ

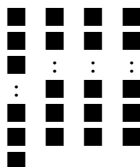
て接するんだ、わかったな」

言うだけ言ったオーガは、椅子の背もたれに大きく体重を預けてセリユーに退出させた

そしてセリユーが退出する直前、最後にこう言った

「あの少佐から目を離すな」

アドバイスとも警告とも取れるオーガの言葉の真意を、セリユーはまだ知らない、胸に突っかかる違和感を何と言ったら良いかわからず、セリユーは無言で敬礼して、オーガの部屋を後にした



上等兵：クレバーⅡラドヴィット（K I A）

意図的に暗く塗り潰された用紙が何枚も重なっている、一体どうしてこんな資料（コレを資料と言って良いのかわからないが）を保存して、あまつさえ人事部にまで回すのか、セキュリティにはさっぱりわからない、そもそもこの紙が何の資料であるかもわからないのだ、唸るのもしかたなかった

「筆圧も無い、塗り潰した部分の復元は無理そうですね」

ライトに照らしてみたり、指先で触感を感じてみたりと色々やったセキュリティだが、念入りに潰された文字から痕跡を見つけて出す事は出来なかった

勿論全部が全部真っ黒であったわけではない、資料の鑑とその下にある身体検査表や個人情報情報の部分は綺麗なもので、ここらに書かれている内容はセキュリティとそう大差な

かった、ただ略歴については流石精銳揃いの北軍と言ったところで、まさに死こそ我が生涯の伴侶だと、そう言わんばかりの苛烈に満ちた軍歴であった、まあ年表ごとに箇条書きで書かれたソレを見ても、正直書かれた以上の事などわかるはずもなく、結局ゲートハート少佐本人の為人については全くわからなかった

一応、セリユーが残業してまでゲートハート少佐の事を知りたがるのには理由がある、それはまあ、セリユーの憶測と偏見によるちよつとした懸念事項のようなものなのだが

「気難しい人だったら、どうしましょう」

ため息をつくように、セリユーの口から不安の言葉が漏れる、というのも軍隊には前線主義な所がある、特に実際に戦役をくぐり抜けた者ほどこの傾向が強く、軍務が長くても戦場を経験した事がない者を新兵呼ばわりして、なかなか信用してくれないのだ、全員がそうである訳ではないが、もしも件の少佐がそうであった場合、前線経験のないセリユーは付き合いに苦労するハメになるだろう、ただでさえセリユーはまだ年若く、女で、しかも童顔である、その上青臭い正義を信じる理想主義者であるのだから、感情の冷え切ったりアリストの多い熟練兵とはとことん真逆の性格をしていた、これで上手

く付き合えたのなら奇跡である

しかしまあ、だからと言って既に命令は下されている、セリユーの否応に関わらず来週にはゲートハート少佐とバディを組んで職務に従事しなければならないのだ

詰まるところセリユーが今している資料漁りにはあまり意味がない、どれだけセリユーが紙に書かれたゲートハート少佐のことを理解しようと、それでゲートハート少佐のセリユーに対する心境が変化する事などない、結局なる様にしかならないのだ、彼女もそれを自覚している、だからそろそろ帰宅しようとセリユーは考えて、チラリと壁に立て掛けてある時計を見た

「ああ……もうこんな時間でしたか」

21時48分

知らぬ間に随分遅くなってしまっている、セリユーの中では21時にはもう帰るつもりでいたのだ、どうも知らぬ間にのめり込んでいたらしい、悪い癖だと自覚していた

時計から目を離して正面に向く、机に散らばる書類、書類、書類、何もゲートハート少佐の人事資料のお陰でこれまで残業してたわけではない、当然それ以外にも多くの仕

事がセリユーにはある、実働の多い捜査課であつても、決して年中構わず脚で稼いで仕事をしているわけではない、セリユーとしてはそちらの方が良かったが現実は違う、何をするにしても必ず行動を起こすその前と後ろには記録を残さなければならないのだ、朝登頂すれば出勤記録簿に、巡察に向かえば定点観察書と帰来報告書に必要事項を記入するし、今からセリユーが帰るのにも残業記録簿を記入せねばならない、ただ出勤して帰宅するだけでこうなのだから、当然普段の業務でも書類は発生する、それを恙無く処置し適切な場所に保管するのも大切な仕事の内なのだ

と、セリユーも頭では分かつていても、なにぶん性に合つていないためか思つた様に仕事が進まず、こうしてダラダラと残業をしてしまつていたわけだ、それで気分転換にと適当にたまたま手元にあつたゲートハート少佐の人事資料を覗き見て、それが思つた以上に興味をそそられ、つい熱中してしまい、そして今に至るといふわけだ、まさに徒勞である

わかつてはいても、いざ自覚すると何とも言えない倦怠感がセリユーを襲つた
「…かえろう」

弱気な言葉も残業による疲労のせいにしておき、セリユーは帰る支度を始めた、で、机上の整頓よりも先に彼女は更衣室に向うことにした、もう私服に着替えるのも億劫に

なつてしまつたので、取りに行くのはコートだけだ、薄暗い廊下を進み、二階上の更衣室の前まで来てドアノブに手をかけた

が、そこで問題が発生した

ガキン！と明らかにドアの開放に強く反発する感触がする、鍵が掛かっているのだ
「うそ……」

いや、考えてみれば当たり前の事だつた、更衣室とは女性が着替えをする場所なのだ、私服から隊服に着替えるのだから下着以外は全て取り替える、邪な事など考えるものなどそうそう居ないだろうが、万が一を考えれば施錠する事は何も不自然な事ではない、ただ、一つ言い訳されて貰うなら、いつもはこうではないのだ、更衣室は基本的に人の出入りが激しく、なおかつ使用時間もまばらでその都度鍵を開けたり閉めたりするのは面倒なので、「いつも」なら当直が庁舎の巡察のついでに閉めてくれている、逆に言えばその時まで閉まることはまずないので、巡察の時間は決まって23時なのでまだ大丈夫な筈だつた、しかしこれらはただの暗黙の了解的なもので、必ずしもそうである訳ではない、誰かが気まぐれに鍵をかけたのだとしても、文句を言える様な事ではないのだ

「鍵は……」

そこまで考え、セリユーはおもむろに自分の隊服のポケットを弄る、もしかしたらあるかも知れない、そんな淡い希望を持ちながら、頭の中ではポケット以外の鍵のありかを考えた

「んん？ポケット多いですね、この服」

なんてどうても良いことに気がつきつつ、しかし結局目当ての鍵はポケットには無く、すると、考えられる場所は一つしかなかった

「…机の中、ですね」

思わずガツクリと肩を落とす、たかだかコートを取りに來ただけなのにこうして何度も手間を取らねばならない事と、その原因が自分の不注意でしかない事実が、なんだか非常に情けなく感じた、まあ、兎にも角にも鍵は開かないのだ、もうコートは諦めるにしろ鍵を取りに行くにしろ、どの道一度事務所に降りねばならなかった

「はあ、ダメですね」

自分への呆れと落胆からか、ほんの少しだけ猫背になりながら、セリユーはトボトボと事務所に戻るのだった

突然だが、セリユーのデスクの周りには人通りが多い、なぜかと言えば、彼女のすぐ後ろにある棚にコーヒーメーカーが置いてあるからだ、それは安物の官品ではなく、退役した警備隊の隊員が贈呈という形で残っていたわりと新しい物で、なかなか美味しいコーヒーを出してくれる、事務所で勤務している警備隊員はみなこのコーヒーを愛しており、特に夜遅くまで勤務する者や、またタバコを頻繁に吸う者は、デスクの上に灰皿と一緒に必ず内側が茶色くくすんだマグカップが置いてある

かくゆうセリユーが残業中飲んでいたコーヒーもまた、件のコーヒーメーカーから抽出された物だった

だからまあ、その日の当直が自分のデスクの近くにいても、セリユーは別に驚かなかった

「お疲れ様です、フロスト准尉」

セリユーの声に気付き、当直に着いていた兵士が振り向いた、フロストとコーウエン准尉、セリユーとは違う部署で民生課の課長補佐を勤めている男だ、年齢的に前線で勤務する事が難しくなり、昇進と同時に南部方面軍から転属してきた、栄転というヤツだ、セリユーは所属する課が違うため直接的な関わりはあまり無いが、仲間内での評判は良い、セリユーもまたその様に思っている

軍隊の前線主義について説明したのを覚えているだろうか、フロスト准尉は経験豊富なベテランの軍人であったが、これといって面倒な偏見は持ち合せておらず、まあ普通に気さくな良い人であった

バディであるゲートハート少佐もかくもあつて欲しいものだと思えばかりである

「ん？ああセリユーか、お疲れさん」

軽い挨拶を交わしたフロスト准尉は、すぐにまた視線を元に戻し、無言で立ったままズルズルとコーヒーをすすった、セリユーは自分に用件があったわけではない事を知ると、軽く会釈をしてから自分のデスクに向かつていった、少々無愛想なのかもしれないが、セリユーにとっては同僚で上官であつてもプライベートで言えば顔見知り以下の人である、これと言つて話すこともなければ対応なんてこんなものだろう、それにセリユーはもう帰るので、余計に何か話してみようとは思わなかつた

と、普段なら考えるが、今日はちよつと事情が違つた、机を片付ける手を止めて、机の上に雑多に散らばつた書類から、一番上に置いてあつたクリップで纏められている書類を手にとつた

「フロスト准尉」

まあ、思いつきのようなものだ、セリユーはフロスト准尉について詳しい事はわからない、ただ彼が軍人として経験豊富である事は知つていた、彼は警備隊への転属と同時に准尉に昇進した訳であるから、戦闘員としての最後の階級は曹長だ、他部隊との人事異動を掌握するのが幹部なら、曹長は部隊内の人事の掌握をしている、新たに入つてく

る者、出ていく者、やめていく者、そして2階級特進を遂げる者、それらを管理し部隊の円滑な運営に勤めるのも上級兵士である曹長の任務だ、だからもしかしたら、セリユーにとっては意味不明だったゲートハート少佐の書類について何か知っているかもしれない、と考えた

「これ、今日隊長から預かった書類なんですけど、後ろの方にある紙が塗りつぶされてよくわからないんですよ、フロスト准尉ならわかりますか？」

「はあ？塗りつぶされてるって、なに？」
「見ていただければわかります」

意味深なセリユーの言葉に、フロスト准尉は少しだけ眉を顰めた、不機嫌になったからではない、不審だったからだ、セリユーの事はよく知らないフロスト准尉であるが、こういういった思慮を挟むような事はしない娘だと認識していた、まあ、だからと言って別にセリユーに対してマイナスの印象を受けたわけではない、意外だった、それだけだ
兎にも角にも渡された書類を受け取る

「どれどれ」

一目見て、渡された書類が人事関係であることがわかった、セリユートの読みどおり、フロスト准尉はこういった書類を何度も捌いてきた、だから見るべき場所にも瞬時に目があった

（誰だコイツ？モーリアンIIゲートハート、知らないな、しかも“少佐”か…多分警備隊の人間じゃないよな、勤務地はリヨジョン、北方の基地だな、それで部隊が空挺つてことは…ウルフパツクの隊員か、薄気味悪い、何でセリユーがこんなヤツの書類持つてるんだよ、まあいいや）

ツツコミたい所は多々あったが、一先ずセリユートの問いに答えるためにページをめくる、1枚2枚と鑑の書類に添付された資料を読み飛ばして、6枚目に差し掛かった所で、フロスト准尉の手が止まった、そのページこそセリユーがわからない所謂“塗りつぶされた”ページだった

「…コイツは…」

確かにそのページは塗りつぶされていた、まばらに判別可能な文字がばらまかれて
いるだけで、とても内容を判別できる状態では無かった、だがフロスト准尉にはこの書
類が何であるかはすぐにわかった、文字や単語が見えなくても、その書類の書式は隠し
ようがないからだ、文章を囲む枠の位置や大きさ、数、形、そういった情報だけでもそ
の書類がどういった物であるかは意外とわかるものなのだ

で、結局その書類は何だったのかと言うと

「こりゃ報告書だな」

「報告書？」

「そう、任務が終わると成功しようが失敗しようが任務中に起こった出来事簡潔にまと
めて報告しなきゃならない、何の為に行って、結果どうなったかをな」

セリユーとて、それがどういった物であるかは知っている、というかまあ、名前を聞
いただけでなんとなくニュアンスはわかった、ただ彼女にはまだ縁がない物だったの
だ、もう少しセリユーが昇進し責任ある立場に着けば自ず関わる事になる物だ

とすると、だ、物はわかった、ではどうして黒塗りにされているのか、という疑問が
残る

「報告書は、わかりました、でも、その、あくすみません、私こういった作業に携わった事がなくて、報告書って普通塗り潰したりするのですか？」

まあ、当然の疑問ではあった、人事書類とはその者の記録を簡潔に紙媒体として残す物だ、当然状態は良好なままにするのが基本で、汚れているのなら取り替えるし、まして中身が判別できないものなど論外だ、そもそもそんな物付ける意味が無い

「まあ、普通はやらんな」

普通は、という事は「特別」な状況ならやるのだろうか、フロスト准尉がそう言った訳では無い、ただ言外にそう言っているようにセリユーは思った

一方のフロスト准尉といえ、これが報告書だと、そう言ったときりゲートハート少佐の書類を渋い顔をして眺めている、その顔を見ると、何となくこれ以上の追求はやめた方が良くようにセリユーは感じた

やがて一通り最後のページまで書類を見終わったフロスト准尉は、紙束をセリユーに返した

「悪いがセリユー、正直俺にもよくわからん、情けない話だが、こういった処置が施された書類は見た事がない、力になれなくてすまんな」

そう言うフロスト准尉の顔は、本当に申し訳なさそうな力ない表情をしていた、そんな顔をされると逆にセリユーの方が申し訳なく思ってしまった、慌ててブンブンと顔を横に振った

「いえいえー……こちらこそ遅くに引き止めてしまつて申し訳ありませんでしたー!」

セリユーがそう言つてしまうと、お互いに話す事は無くなつてしまつた、するともう、セリユーが仕事場に止まる理由が無くなった、そもそもセリユーはただ更衣室の鍵を取りに戻つて来ただけの筈なのだ、それが思わぬ寄り道となつてしまつた、そして結局ゲートハート少佐についてわかつた事など何も無いに等しい、徒労ここに極まれり、といったところだ

本当は余程ため息をつきたい心境のセリユーだったが、それは流石に付き合つてくれたフロスト准尉に失礼なので、さっさと帰る支度をした、ちなみに更衣室の鍵はやはり

机の中にあつた、これからまた階段を一つ上がつて、その分一階の正面玄関まで余分に降らねばならない、それもまた微妙にしんどく思い、結局セリユーはコートを取らずに帰る事に決めた

「まったく、何から何まで……ままならいですな

本当に、ため息一つ吐けない現状が恨めしかった

「あ、フロスト准尉、なんかお手間かけさせちゃってすみませんでした、その書類の人なんですけど、どうも近いうちにわたしのバデイになるみたいなので、気になるのですしたら何かわかつたら報告しますよ、お疲れ様でした」

最後に、なんだかんだお世話になつたフロスト准尉にお礼を言つてから、セリユーは事務所のドアに手をかけた

「おいセリユー」

「なんでしよう?」

「その少佐から目を離すな」